

高岡の特産産業

高岡の特産産業の起りは、今から約 400 年前、加賀藩二代藩主、前田利長公が高岡に入城し、鋳物工場の開設、綿取引所の許可など、新しいまちづくりのための産業振興に力を注ぎ、保護育成を図ったことに始まる。このように古くから育まれた高岡の産業は、その後、全国に誇りうる地場産業として目ざましい成長を遂げ、そこから発展した伝統的技法等は、商工都市高岡の原動力となっている。

この様に、伝統と特色ある地場産業に支えられ、「ものづくりのまち」として発展を遂げた高岡市は、平成 21 年に開町 400 年の節目の年を迎えた。銅器や漆器、仏壇に代表される伝統産業は、先人のたゆまぬ努力によって培われた匠の技術・技法を今日まで継承し、独自の発展を遂げてきている。また、アルミニウム等の近代産業も発展し、多様な産業基盤が根付いている。

さらに、平成 20 年 4 月には、これまで生産に重点を置いていた金工、漆工等の分野において、高岡地域文化財等修理協会が設立され、修理ビジネスという新たな市場を開拓するとともに、富山大学芸術文化学部と連携し、後継者育成、技能の継承に取り組む新たな動きも出てきている。

調査要領等

この調査は、業界振興の基礎資料とするために、高岡の地場産業の生産、出荷、販売動向等を、主な事業所を対象に実施した。掲載されている数値等は、回答のあった事業所の数値等を累計したものである。

調査の方法は、アンケート調査により、隔年調査として実施している。
今回のアンケートの回収率は、78.6%であった（前回 80.5%）。

調査対象期間は、各企業における、平成 24 年度決算期間である。

目 次

高岡の銅・鉄器	1
高岡の漆器	9
高岡のアルミニウム	14
高岡の仏壇	18

高岡の銅・鉄器

【産地の特色】

高岡銅器は、慶長 16 年(1611 年)に加賀藩二代藩主前田利長公が高岡のまちの産業振興策のひとつとして、現在の高岡市金屋町に鋳物工場を開設したことに始まる。当時は鍋・釜・農機具などの鉄鋳物が主体であったが、幕末から銅器美術工芸品へと発展し、明治時代にパリ万国博覧会に展示されるなど、世界的に知られることとなった。戦時中、軍事使用のため金属が手に入らず、壊滅的な打撃をうけたものの、戦後、先人たちの努力により、急速に復興し、さらに新製法の導入により大量生産体制が確立され、昭和 50 年 2 月には伝統的工芸品として国の第一次産地指定を受けている。

産地の特徴として、製造・加工部門では工程別の分業体制が確立されており、事業所規模は小さく、職人集団的色彩が強いことや、集積度合いが全国の産地に比べ、かなり高いことなどが挙げられる。製造業者は作ることに専念し、新商品開発や販売機能はほとんど産地問屋が担うという分業体制が採られてきたが、近年、産地問屋からの発注が減少したこともあり、独自に国内外に販路開拓を行う製造業者が増えてきており、銅器産業の構造に変化が見受けられる。

【銅・鉄器の動向】

平成 24 年度の銅器販売額は、約 120 億円で対 22 年度比 0.1% 減、鉄器は、約 2 億 6 千万円で対 22 年度比 19.7% 減と、それぞれ減少している。また、銅・鉄器の 1 社当たり販売額は約 1 億 1 千円 2 百万円(対前回比 100.5%)となっている。顧客ニーズの変化や中国をはじめとする安価な外国製品との競合に加え、平成 20 年秋以降の世界的不況、金融危機による景気の低迷により個人消費が冷え込んだことが要因と考えられるが、一部持ち直しの兆しもみられる。また、従業員の減少と高齢化も進展しており、不況の中で若手後継者の確保が非常に困難な状況となってきている。廃業や規模の縮小を図る事業者も増えてきており、問題といえる。

一方で、今日では特色ある地域づくりと地場資源を活用した産業振興が注目を集めしており、銅器業界においても、行政や大学等の研究機関と連携し、新商品・新技術開発に取り組む新たな動きが出てきている。国において平成 19 年度から始まった中小企業地域資源活用プログラムでは、高岡銅器の製造技術が地域資源として認定され、新商品・新製品開発に取り組む中小企業に対し、商品開発等補助金、設備投資減税、低利融資、専門家派遣など、総合的な支援が実施されている。また、平成 23 年度より、国の JAPAN ブランド確立支援事業を活用し、「高岡銅器の高い技術」と「世界で活躍するクリエイターの先進的な発想」によって、現代のライフスタイルで求められる新たな商品を開発し、高岡発のインターナショナルブランド「KANAYA」を作りあげ、新たな販路拡大に取り組むなどの動きもあり、産地がより一層活性化することが期待される。

高岡の漆器

【産地の特色】

高岡漆器は、加賀藩二代藩主前田利長公の産業振興策のひとつとして始まる。当初は、箪笥、長持、針箱、膳などの生活用品や家具が主であった。その後明和年間(1764～1772)に中国風の様式が取り入れられ、明治初期までに現在の高岡漆器の特徴である「彫刻塗」「勇助塗」「青貝塗」の3技法が確立され、産地の名声を内外に高めることとなった。これらの技は、歴代の名工によって伝えられ、多くの名作が作られるとともに、国の重要有形無形民俗文化財の高岡御車山に凝縮されており、高岡の文化として今日に継承されている。昭和50年9月には伝統的工芸品として国の産地指定を受けている。

高岡銅器同様、工程別の分業体制が確立されており、事業所規模は小さく、職人集団的色彩が強いことも大きな特徴である。

【漆器の動向】

平成24年度の高岡漆器の販売額は、約6億9千万円で、対22年度比3.7%減となっている。高岡銅器と同様、中国製品等安価な外国産商品の輸入に加え、平成20年秋以降の世界的不況の影響による個人消費の低迷等が原因と見られ、業界全体として販売額が落ち込む結果となった。

この様な状況に対し、業界では質の高い伝統性と現代生活に合うモダン性の融合した漆器製品の開発を図り、新たな需要と販路開拓に取り組む動きが出てきている。デザイナーと組み、デザイン性の高い文具、インテリア、雑貨等幅広い製品開発が行われ、関連団体が主催する展示会、見本市へ積極的に出展する動きが見られるなど、需要の掘り起こしに向けた取り組みが活発化している。近年、消費者のライフスタイルが多様化している一方で、漆を用いた和のテイストの魅力が改めて注目されており、「癒し」や「和み」を感じさせる商品として漆が見直されてきている。現代の消費者ニーズに応える新商品・新技術が開発され、業界が活性化されることが期待される。

また、漆器業界においても事業者の後継者確保が大きな課題となっており、これも需要不足が最大の要因と見られる。こうした課題に対し、本市では国の構造改革特区の認定を受けて、平成18年度より市内の小・中・特別支援学校全40校において「ものづくり・デザイン科」を設置し、児童・生徒に対し年間35時間の伝統工芸品の製作体験学習を行っている。学校教育の場から伝統の技に直に触れる場を設け、ものづくりのまち高岡の市民意識の向上を図り、地場産業の活性化に繋げようというものである。

この様に、業界と行政、関係機関が連携し、製品開発から販路拡大、人材育成に至る様々な取り組みが行われており、今後の業界振興に繋がることが期待される。

高岡のアルミニウム

【産地の特色】

高岡のアルミニウム産業は、本市の伝統産業である銅・鉄器の鋳物技術をもとに、昭和初期に鍋・釜などの日用品を製造し、近県及び中京方面に出荷したのが始まりである。戦後の経済復興と日本経済の成長からアルミ需要が拡大し、本市では豊富で低廉な電力と水を背景に、アルミ業界は急成長を遂げた。現在、住宅用・ビル用建材を中心に、エクステリア製品、家庭用厨房品、機械車両部品などを生産している。アルミ建材分野においては、本市の中核的産業をなすだけではなく、全国的な生産規模を誇り、富山県におけるリーディング産業の地位を確立している。

近年は、消費者意識の変化により、大量生産・大型消費の時代から少量多品種生産の時代へと移行しており、それに対応できる生産体制づくりに取り組んでいる。

【アルミの動向】

平成24年度のアルミニウム製品の出荷額は、約2,985億3千万円で、対22年度比5.4%減となっている。内訳としては、ビル用建材が約764億円で対22年度比24.0%増、住宅用建材は約925億9千万円で11.3%減、エクステリア製品は約554億2千万円で23.1%増となっている。ビル用建材、エクステリア製品で大きく出荷額が増加したもの、全体の出荷額は減少となった。

本市で大きなウェイトを占める建材分野においては、非住宅用建築面積の増加や改装市場の拡大、一部災害復興需要もあり一部生産額が増加した。

非建材分野においても、原油をはじめとする原材料価格の高騰や平成20年秋以降の世界的不況の影響等により、生産額が伸び悩んでいる。個人消費や企業の設備投資意欲が低迷する状況が続いている。企業を取り巻く環境は依然として厳しい状況である。

この様に、世界経済の減速懸念が広がり、売上受注不振、販売単価引下げ、原材料価格の乱高下と、市場の見通しがつかない状態の中ではあるが、一方で、企業は独自の新製品・新技術開発に取り組んでいる。住宅リフォームや耐震など安全性への需要が高まる中で、顧客のニーズに合わせたデザイン、機能などを追及し、高付加価値製品の開発に取り組み、他社との差別化を図ろうという動きが出てきている。また、太陽光発電の普及を推進する国の政策や、消費者のエコ意識の向上に対応し、環境に配慮した住宅関連製品の開発に力を入れる動きも見られるなど、今後の動向が注目される。

高岡の仏壇

【産地の特色】

高岡の仏壇は、慶長年間に指物師大場庄左衛門が高岡に移り住んで家具を作り、漆塗装を行ったとする記録があることから、このころが高岡での仏壇製造の始まりとされている。その後、天保年間に仏壇塗師高森重次郎の活躍などにより、少なくとも 150 年前には現在の高岡仏壇の基盤ができあがったものと考えられている。

当産地は、真宗王国という風土のもとで、藩政時代から今日まで、規模は大きくないものの、堅実な産業として地歩を固めてきた。

高岡仏壇は、材料にくさまき・いちょう材を使用している。これは、全国でも高岡だけが使用しており、長年の耐久力は最も優れていると云われている。また、高岡銅器の彫金の伝統を受け継いで冴えた技法を開発し、独自の工法による耐久力に優れた表金具の使用箇所が多いことも特長である。さらに、彫刻の使用部分が多く、金箔が仏壇内部に箔押されて、莊厳かつ美装華やかである。高岡仏壇は、古来の技術を継承し、あくまでも漆塗りを堅持している。まさしく、高岡の伝統技術の粋を集めているといえる。

【仏壇の動向】

平成 24 年度の仏壇販売額は、約 11 億 7 千万円で、対 22 年度比は、26.0% 増となっている。しかし、核家族化の進行や信仰心の薄れなど、消費者のライフスタイルや住宅事情の変化から、仏間の無い住宅が増加し、業界を取り巻く環境は厳しい状況となっている。また、海外製造による製品の低価格化の影響等により、消費者が求める価格帯そのものが低下しており、事業者にはこれまで以上に徹底したコスト削減や生産・品質管理が求められることになる。

また、事業者の年齢構成については、50 代以上が 6 割と高い比率を占めており、後継者確保が大きな課題となっている。長年使用された仏壇の修理には高度な修復技術が必要とされ、伝統技術の継承と後継者育成への早急な対応が求められる。

近年、東京、大阪などの都市圏では、居室に置いても違和感の無い家具調の仏壇や、集合住宅等で利用しやすいコンパクトでインテリア性の高い仏壇の取り扱いが拡大している。顧客ニーズの変化に伴う新たな動きが出てきており、現代の生活空間にマッチした製品の開発や販売方法の検討など、市内の事業者は様々な課題に直面しているといえる。

高岡特産産業のうごき

平成 26 年 3 月 発行

高岡市産業振興部 産業企画課

高岡市広小路 7 番 50 号 Tel 0766-20-1285